

とりあえず書いた作品集

通りすがりの錬金術師

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

思い付いたから書いたは良いが、作者の原作知識がハーメルン知識のみだったり、現在連載中のやつ以外に連載作品を増やすと面d……ゲフンゲフン、難しかったり、続きが書けなさそうだったり、連載中のが完結or行き詰まった時に書こうと思ったりしたものを置いておく、恐らく需要のないもの。たまに続きができる。

なので評価は特に要りません。

……コメントとか言ってくれれば続き書く気になるかも？

目次

明星（あかぼし）の魔王少女	1
王の配下となりて、リリカルな世界を生きる	4
兎&戦車（ラビットタンク）な少女のヒーローアカデミア	7
荒ぶる世界で生きてゆく	10
荒ぶる世界で生きてゆく2	14
神喰いのシンフォギア	18
王の配下となりて（以下略）2	23
近界人とリリカルな世界	28
IS世界の魔法少女	34
IS世界の魔法少女2	39

明星（あかぼし）の魔王少女

気が付いたら高町なのはになっていた。

……いや、私でも何がなんだかよくわかってないけどさ！？

ハッキリとした記憶を取り戻したのは幼稚園に通い始めた頃。私の名前を呼ばれた時に自覚したよ、前世の記憶を。しかも名前といい、容姿といい、前世で見たりリリカルな世界なのか……って。友人がなのはとかならば干渉しないって手がとれたけど、自分がなのはになっちゃったからには干渉しないと世界が減びかねない。故に干渉するしかないんだよね。

その後、家に帰って改めて（分かる限りの）現状を確認した。実家は有名な喫茶店だった。つまり翠屋ですね、はい。姉と兄がいた。名前は美由紀と恭也、ちなみに母と父の名前は桃子と士郎。

ハハハ……ヤバいね。今から魔力制御の練習とかしといた方がいいよね？

（ちなみにいくらやっても魔力の『ま』の字すら感じられなかった……なんか悔しい）

そんなこんなで時が進み、ついに来た小学校入学……憂鬱な気分になりながら、両親に連れてこられた学校は……なんと、普通の公立小学校だった。え？ここってリリカルな魔法少女の世界じゃないの？

クラスメイトにも同級生にも、月村すずかやアリサ・バニングスなる名前の子は存在せず、リリカルな原作が始まる小学三年の時にも何もなかった。

ジュエルシードなる青い宝石事件や闇の書なる事件もいつさいがっさいなかった。そもそも、住んでいる地域の名前が海鳴市ではなかった。この時まで気付かない私って……

そして、小学校卒業、中学入学、中学卒業、高校入学と時が進んでいき、その頃にはすっかり転生とかそんな関係のことは忘れていた。私は偶然、見た目や名前が高町なのはそっくりに生まれ変わって前世

の記憶を取り戻しただけの少し変わったただけの人だと決めつけて。

高校でとある事件に巻き込まれるとは、思わずに。

その事件が起きた日、私はいつも通り登校していた。

学校に着き自分のクラスの教室の扉を開けると、

「あ、なのはちゃんおはようー!」

「なのは、おはよう」

「香織ちゃん、雫ちゃん、おはよう!」

中学からの友人（というより、もはや親友と言っても過言ではない仲）の白崎香織ちゃんと八重樫雫ちゃんに挨拶されたので、こちらも返す。そして自分の席に着いて授業の準備をしていると、南雲ハジメ君が若干ふらつきながら教室に入ってきた。それを見た香織ちゃんはすぐに彼のところへ行く。どうやら香織ちゃんは彼、南雲君のことが好きようだ。まあ、本人にその自覚はないみたいだけど……

だから毎日話しかけにいっているが……南雲君は鈍感で香織ちゃんの気持ちに気付いていない上、逆に関わらないでほしいと思ってるみたい。主に他のクラスメイトの視線がヤバイから。

他にも天之河光輝君や彼の親友の坂上龍太郎君というクラスの人気者も香織ちゃんにつられて南雲君のところに行く。そこで毎日のように起こる言い合い（と言っても天之河君や坂上君が南雲君に一方的に言うだけだ）を香織ちゃんや雫ちゃんが庇うような形で止めるからそれで更に南雲君への視線がヤバくなっていく。

うーん、色々和不憫だねえ……

まあそれはさておき、チャイムがなりいつも通り普通の授業が始まる。

授業の内容なんて特に関係ないから割愛。

そして4限目の授業が終わり昼休みに入る。私は教室で昼御飯のために持ってきた大好物のシュークリーム(母作)を食べている。え？他のはつて？……気にするな！

この至福の時間だけは例え親友であろうと邪魔されたくない。南雲君のところでもまたいつものように騒ぎ(?)が起きているがこの時ばかりは無視している。

だけど、周りがうるさかったのがいきなり静かになった。不信に思い見回すと、天之河君の足元に謎の魔方阵が出ていた。

そしてそれが大きくなっていき、教室が収まるくらいに広がって徐々に光り出す。

まだ教室に残っていた4限の担当だった社会科の畑山愛子先生(25歳、身長150cmと小さい)が全員に避難してと叫んだその時、爆発するように輝いた。

何事!?!と思う間もなく、私たちの目の前が真っ白になった。

目が慣れて辺りが見えるようになると、私は巨大な壁画のある巨大な広間にいた。いや、私だけでなくあの時教室にいた全員がここにいるようだ。

そして周りには、法衣を纏って祈りを捧げているように跪いて手を組んでいる30人ほどの人たち。

そこから一人の老人……と言っているのか、老人らしからぬ覇気を持った70歳くらいの男の人が歩み出てきて、私たちに話しかける。

「ようこそ、トータスへ。」

勇者様、そしてその同胞の皆様、歓迎致しますぞ」

……え、なにこれ、もしかしてこれが小説とかでよく見るクラス丸ごと異世界召喚ってやつなの!?

「畏まりました。次に私のポジションを『仮面ライダージオー』に出てくる■■■■のポジションで」

『……何を企んでいる?』

「それは最後の特典で恐らく分かるかと。」

最後は――」

『……………ククククク、ハハハハハ!!よかろう!』

認められましたか。楽しみですね。

『最後に』

ん?

『何故そのような特典もを選んだ?だいたいなのやつなら「俺TUEEE EE」や「私TUEEE EE」な特典もを選ぶというのに』

そんなの決まっています。

「だってこっちの方が面白いでしょう?」

『……………』

「……………」

『クク……』

「……………」

『クハハハハハ!面白いときたか!確かにその通りだ。普通なら誰もそんな特典を自分から選んだりしないだろうな!ましてや一つ目の■■■■に転生など!』

『さて、それでは転生させるとしよう。後悔するなよ?』

「後悔なんてしませんよ」

『では、行け。その扉を潜れば直ぐだ』

そう言われ、私はいつの間にか現れていた扉をゆっくりと潜り抜けると、光が私の視界を塗りつぶした。

ここから始まるは私の物語ではない。私が支える王の物語である。

祝え！全てのライダーの力を受け継ぎ、世界を統べる王の誕生を！
………なんてね？

兎&戦車（ラビットタンク）な少女のヒーローアカデミア

イヤだ、こわいよ、だれかたすけて……

おかあさんが、さされて、ちだらけで、ねている。

いきなり、いえに、はいつてきた、へんなひとが、たぶん、こせいで、おとうさんを、●●して。

そのあと、てにもつてた、はももので、おかあさんを、さして。

っ！へんなひとが、こつちに、くる。

いや！こないで！

だけど、そのひとは、わたしに、はもものを、ふりおろした。

「せん、とは……だ……め……コフツ」

でも、おかあさんが、おきてきて、わたしを、まもった。

そのかわり、おかあさんの、ちで、からだか、よごれた。

「あ？なんだ、まだ動けたのかよ。だけど、もう無理だろ」

へんなひとは、わたしを、まもった、おかあさんを、つかんで、なげた。

やめて、なんで、こんなことを、するの？

「なん、で……う？」

「あ？……ああ、俺がやりたいからだよ」

やりたいから？そんなことで、おかあさんと、おとうさんを、●●したの？

「俺は人が苦しんでいるところを見るのが好きなんだよ。ほら、お前も好きなことがあるだろう？それと同じだ、よ！」

「ゲホツ！」

おなかを、けられた。いたい、くるしい。

……しにたくない。

「まあ、ガキにこんな話をしたところでわかんないだろうがな。

さて、ちんたらしててヒーローに来られると面倒だ。じゃあな、ガキ」

イヤだ、イヤだ、イヤだ、イヤだ……しにたくない！
だけど、そのひとは、わたしを、さそうとして……

【HAZARD ON!】

きづいたら、オール、マイトに、おんぶ、されていた。……なんで？

事件は突然だった。私がパトロールしていたら爆発音が聞こえ、爆心地であろうところから煙があがっている。

目視出来るということはそんなに距離が離れていない。そこに敵ライアンがいるいないに関わらず、人助けがヒーローの仕事だ。

私は急ぎ現場に向かった。そこは少し大きめの普通の一軒家だった。最初の爆発が原因か、燃えていたので消防隊がかけつけ消火活動を行っていた。私はその中で、燃えている家に消防隊と共に入り、人が取り残されていないか確認をしていた。

家の中には、明らかに外傷が原因だと思われる遺体が二人分、恐らくこの家に住む夫婦だろう、があつた。燃やされてしまう前に消防隊に預け、外に運び出すことに。近所の人の話では、まもなく四歳になるであろう一人娘がいるとのことだが、まだ見つかっていない。

私の経験上、敵ライアンが関わっているだろうことは確実だった。連れ去

られたならまだ助けられる可能性はあるが、既に殺されているかもしれない。最近、不特定多数の人たちが大人子供関わらず殺される事件が相次いでいる為、後者の方が可能性が高いというのが一番の心配だ。

無事でいてくれよ、そう思った時だった。私の視界に機械っぽい紅い兎の姿が見えたのは。

その兎は私を見ると、ついてきてくれと言わんばかりにチラチラとこちらを何度も振り向きながら、とある方向へと跳び跳ねていった。
サイン
敵の罠かもしれないと警戒しながらも、私はその兎についていく。

到着した場所は先ほどの家の裏手にある山。そこで私は意識を失い倒れている少女を発見した。その少女の周りには戦車だろうか？小さな青い戦車が計7機ほど、少女を守るように囲んでいた。

彼ら？は私が少女に近づくのを見ると、砲口をこちらへと向けてきたが、兎もいるのを確認したのか警戒を解いた。

恐らくだが、この兎と戦車はこの少女の個性なのだろう。詳しく話を聞く必要があるが、一先ずは無事で良かった。そして、聞こえていないだろうが一言。

「大丈夫だ、私 came」

よく見ると少女の体には打撲の跡などがあるため、とりあえずは病院へ連れていくことに。少女をおんぶして消防隊のところまで運んでいると、少女が目を覚ましたようだ。

「……オール、マイト？」

「ああ、今はゆっくりと休んだ方がいい」

「おかあさんと、おとうさんは？いきてるの？」

……

「わたしは、なんで、オール、マイトの、せなかに、いるの？なにが、あったの？」

「……その話は後でしてあげよう。とりあえず今は病院で検査だ」
「？わかった」

さて、この少女にどう伝えるべきか、この先どう生活させるか、考えなくては……

荒ぶる世界で生きてゆく

……ここはどこ？何故こんなところにいる？

確か俺は学校の帰りに……くそっ、ダメだ。思い出せねえ。

まあ、いい。とりあえずは現状確認か。持ち物は……何も無いと。それで周りに見えるのは木・木・木……森か？恐らくどこかの森なんだろうな。だが、気になるのは所々に見える朽ちた建物の成れの果てと思わしき物体だ。後で調べてみるか。幸いにも水場は近くにあるし死ぬことはないと思いたい。

一先ず、池と思われる水源へと行き、水が綺麗なのを確認した後、一口。うん、旨い。……いや、まあ普通の水だけだ。

と、ここで俺は少し違和感を覚えた。具体的には、水を飲む時に水面に写った顔に……。自分の記憶では、そう。Fate／grand order等のFateシリーズに出てくる青セイバーのような顔、いわゆるアルトリア顔に似ていると言われたことはある。言われてみると確かに似ている気はした。別に瓜二つって訳でもなかったが。

だが、今はどうだ。もう一度確認してみるが、完全に記憶に残るアルトリア顔である。ついでに身体の方も見てみる。スラッとした綺麗な足、大きく発達した自慢の胸、か弱そうな細い腕……つまりは乳上、もしくは獅子王こと、クラス・ランサーのアルトリア・ペンドラゴンその人である。ふむ……

なぜこうなった！？

俺は確かに元々胸も大きく、背も高かった記憶はあるけど……いわゆるコミュ症というやつを発症していて、そのせいで昔からスマホのゲームばっかやって……特にハマったのがFate／grand orderで、最初に当たった星5サーヴァントのモードレッドに愛着がわいて、ちよつと口調をモードレッドっぽくしたら、いつの間にか（何故か知らないけど）姐御って呼ばれるようになって……気付

いたら自然と出る一人称が『俺』になつてたな……アハハ。あ、最近FGOログインしてないな……ログインしないとって、手元に端末ないじゃないか！ちくしょう！

……とりあえず現実逃避はやめるか。

次は俺……何故かアルトリア（ランサー）そっくりになつてるし一人称は『私』の方が彼女らしいか。ん？そっぴいやモードレッド口調では普通に話せていたし……もしかして口調を真似しているとコミュニケーションが発生しないのか!?

まあ、それは今はどうでもいいか。

気を取り直して私の出来ることだけ……何が出来るんだ？（何故か）姐御と呼ばれていた私だけど、子供が好きで目指していたのは保育士のため、出来ることといえば……

・ピアノ（そこまで上手くない）

・裁縫

・子供と仲良く遊ぶこと

・ゲーム

くらい？

……あれ、もしかしなくても詰んでる？サバイバル関連の技能なんて持ってないし……。早く町や村でも見つけないと餓死してしまうじゃん!?

いくらアルトリアそっくりになっているとはいえ流石に聖槍とかを呼び出したりすることは出来る訳ないしな。まあ、言うだけならタダだしやってみるか。

「聖槍、抜錨……なんてな」

やはり、何も起き——カツ！——は？

突如右手に光が収束しだして、それが槍の形をとったと思えば、そこにあったのは最果てにて輝ける槍^{ゴミアード}。

……マジか。もう一度言おう、マジか。

いや、それよりもこれどうやってしまえばいいの!?!人に見られたら確実に危ない人に見られるよ!?!それにこれがもし女神ロンゴミアードのなら宝具の中でも桁違いの威力を持つてるはず——普通の宝具

の威力が10000〜30000に対して300万とか——だし。……
まあ、私は人間だし、流石に無いわな。

少し慌てたが、消えろと軽く念じると聖槍は消えた。もちろん再び
呼び出すことも出来た。

それから約束エックスされた勝利の剣カッパも呼び出せた。原作通り風を纏カわせ
て刀身を見えなくすることも出来たし。

とりあえずここまでのことを纏めよう。

- ・何故か私はアルトリア・ペンドラゴン（ランサー）になっている。
- ・聖槍、聖剣を呼び出せる。ついでに風の魔術も使える。
- ・食料が無く、ここがどこかわからない。
- ・手持ちが何も無いため、服がこれ（今着てるシンプルな下着とシヤ
ツとズボン）以外何も無い。
- ・お腹すいた。（↑ここ重要）

さて、どうするか……つと誰かが近づいて来ているようだ。ガサガ
サ揺れる草むらから現れたのは、小さな恐竜みたいな姿をした（とは
言え人間サイズはあるが）白いバケモノ。顔には大きな牙が下顎から
生えている。

って危ない!?

そのバケモノは私の姿を見るなり尻尾からトゲを飛ばして攻撃し
てきた。まさか、この廃れた建物とか人間がいなかったりするのはい
つに滅ぼされたからなかったとかじゃないよな!?!とにかく、このまま
だと私の命は危ない訳で……

「聖剣、解放!」

風を纏わせ刀身を隠した聖剣を呼び出し、構える。戦ったことなど
ないし、武器を持つのはさつきが初めて。だけど何も出来ずに死ぬよ
りはよっぽどいい。幸いにも敵は目の前の一体だけ。運が良ければ

なんとかなるかも知れない。生まれて初めての戦いに手が震えるが、それを気合いで押さえつける。

バケモノは私に向かって歩みを進め、大きく口を開いて噛みつきこうとしてくる。動きはそこまで早くなく単調だったので、それを横にステップして避け、すれ違い様に聖剣を振り切り裂く。それで微かに怯んだのを見て、更に追撃。だが、バケモノもやられてばかりではなく、反撃とばかりにその場で回転し、尻尾で攻撃してきた。咄嗟に聖剣を滑りこませガードする。小柄な体躯に似合わず結構なパワーを持っているようで、聖剣こそ手離さなかったものの、衝撃で軽く飛ばされ尻もちをつくことになった。

しかし、それだけでも十分に隙になってしまう。まだ立ち上がってない私にバケモノは噛みつきこうと口を開けて突進してきた。

「ッー……風王鉄槌！」
ストライク・エア

咄嗟に聖剣に纏わせていた風を解放し、バケモノを吹き飛ばす形で距離を取る。ほんとに咄嗟にやったことには出来た方だとは思う。何しろやり方なんてわからず勘でやったから。

防具なんてものは無いので攻撃を喰らわないことを最優先にしながら果敢に攻めていく。

「これで、トドメだ！」

そして、振り下ろした聖剣の一撃でバケモノを仕留める。しばらく待って、動かないのを確認出来たので近づいてみる。聖剣で軽くつくも反応しない。

ふー……助かった？

とりあえずはよしとして、これ……食べれたりするのか？ いや、食べたいかと言われると食べたくはないけど、お腹がすくと動けなくなるし……。

とか、思っていると倒したバケモノの体は自然と崩壊していつて最後には黒い粒子となって消えていった。

………そんなあ。

と、まあこんな感じで私の異世界(?)生活が始まったのだった。

荒ぶる世界で生きてゆく2

ある日、気づいたらバケモノの彷徨く異世界らしきところに転移（?）していた私。姿もアルトリア・ペンドラゴン（ランサー）と化していたし、いきなりバケモノに襲われたりと踏んだり蹴ったりだった。

それからおよそ二週間が経って、色々とわかった事がある。まず、この世界。どうやら異世界ではなく地球だそうだ。ただし、2070年代らしいが。私は平成生まれの18だったのだが……もし同級生とかが生きていたら70とかか。50年近く未来に転移、しかも世界は荒廃しているときた。

その荒廃の原因は、私が襲われたあのバケモノ。通称をアラガミというらしい。オラクル細胞なるもので構成された単細胞生物で、そのオラクル細胞の特性上、同じアラガミか、オラクル細胞を使用して出来た武器（神機）を振るう戦士、ゴッドイーターにしか倒せないそう

だ。

オラクル細胞とは、私の生まれ育った時代に発見された細胞らしく、あらゆるものを補食し、学習、進化していく細胞とのこと。最初はほんとに小さな微生物のようなものだったそうだが、次第に大きくなっていきバケモノと呼べる存在になったそう。そしてその学習内容には攻撃等も含まれるようで、刀や銃、果てには核すらも通用したのは一度きり。アラガミに対抗できる神機が作られるまでは人類はだんだんと衰退していった。

そして今はそのオラクル細胞を発見したフエンリルという北ヨーロッパにあつた製薬会社が神機を開発、ゴッドイーターを纏める組織として人類の希望となっている。

まあ、多少は省いたがこういうことだ。

さて、ここで疑問に思うのは何故そんなアラガミに私ごときの攻撃が通用したか、だ。

これは単なる推測に過ぎないが、私の使った武器は^エ約^ク束^スされた^ス勝利^カの^リ剣^バ。人々の『^コう^ウであ^ッて^テ欲^シい』という願いを元

に星が編んだ『最強の幻想』^{ラスト・ファンタズム}。星、つまり地球が造り出した聖剣だから同じ星を闊歩するアラガミに通用するのだと思う。この二週間の間^{地球}に最果てにて輝ける槍は試していないがたぶん同じように通用するだろう。

ちなみにアラガミやゴッドイーター等についてどこで知ったかと言おうと、

「みなさん起きてください！朝です！」

『『『ふあーい……』』』』

なんとか森から出て、適当に歩いていると見つけたコロニーみたいな場所、サテライトという人類の生活圏の一つで情報を集めたからだ。アラガミと戦い森を歩いたので、まあ、その何て言うか……疲れていた上に、服とか肌とかが汚れたり傷ついたりしていてな。サテライトを守っていた職員にアラガミに襲われて逃げてきたのだと思われるので、サテライトで保護されたのだ。

いや、それでいいのか職員。

まあ、こんな世紀末(?)だし犯罪者はほとんどいないだろう。アラガミから逃げたのだとしたら身分証明書になるものなんて持っているのは珍しいだろうし。

お金も無い私がサテライトに入ってしまったことはとりあえずの宿と仕事探し。食料の配給はあるといえ、寝床やお金はあつた方がいいと、いうわけでサテライト内を探し回り見つけたのが今の仕事。

孤児院の住み込みの職員だ。保育士とは少し違うが、似ているし何より住み込みというのが助かる。ちなみに職員は私を含め3人。それに対して子供はおよそ15人ほどいる。子供好きで保育士を目指していた私には色々な意味で天職だ。

「ほら、サラの美味しいご飯が待っていますよ。早くしないと……」

「しないっ？」

「私が全部食べちゃいます」

「それはダメー！」

まあ、私はどこぞの騎士王様みたいに腹ペコキャラではないのだが、育ち盛りの子供にさっきの言葉は効果靦面のようで、みんな直ぐ

に起きていく。ちなみにサラというのはこの院長の名前だ。女性でとても若く(20〜30代に)見えるが年齢はまもなく40らしい。どうみても同年代くらいか少し上にしか見えない若さに嫉妬してしまう。

子供たちが全員部屋を出たのを確認すると私も食事の為に食堂へといく。

「あーアルト姉ちゃん、早く!」

「お腹すいたー」

「わかっています」

アルトというのは私の今の名前だ。明らかに日本人ではない見た目で日本名を名乗っても怪しまれるかと思いい、この姿の名前『アルトリア・ペンドラゴン』から借りて、とりあえず『アルト』とした。

「それじゃあ、アルトちゃんも来たことだし食べましょう。いただきますー!」

「「「いただきますー!」」」

子供たちと共にご飯を食べた後は掃除の時間。みんなで部屋の布団を片付けたり、雑巾とかで床や机を拭いたりする。それが終わると子供たちを連れて外に買い物だ。……………なのだが、

「ソレーツ!」

「ヒヤツ?!…………ケン!カナ!」

子供たちの中でも問題児のケンとカナが毎回のように私に悪戯を仕掛けてくる。サラ曰く、私が増えて人が増えて嬉しくてはしゃいでいるだけらしい。最初はいきなり抱きついてくるとかだったから笑って見逃していたが、最近はどんどんエスカレートしてきている。今日に関しては、私のスカートを下ろそうとしてきて——なんとかそれは防げたが——そろそろちよつとしたお仕置きが必要ですか。

「二人とも待ちなさい!」

「アハハ!アルトが怒った!」

「逃いげるんだよお!」

ええ、いつもは大人気ないと思いわざと逃がしていますが、今日は捕まえてお尻ペンペンしてやります!

「あの二人、またやってるよ……」

「いつもはアルトお姉ちゃんが本気で追いかけてないから逃げれるだけだとは思うけど……」

「だよね……あ、今日は捕まった」

神喰いのシンフオギア

ヤメロ、ヤメテクレ!

トマレ、トマツテクレ!

ナンデ ジユウガ キカナイ! オレノ カラダ ダロウガ!

【■■■■■■■■■■■■■■■■■■!!!】

「クツ!?」

「■■■■ちゃん!」

——ガキンツ!——

ッ!カラダガ、ウゴク。■■■■ハ、キズツケタクナイ。イマノウチ
ニ、ハナレル。

「あつ……」

カナシゲナ、■■■■ノコエガ、キコエル。

「待つて! 待つてよ、■■■■!」

……ゴメン、マテナイ。

「嫌だよ、私を、置いてかないで! ■■■!」

(3年前)

——ウウー、ウウー、——

「はぁ……はぁ……まだ追ってきたるのかよ……」
俺は今、迫りくる災厄から必死に逃げている。

およそ10年に1度、どこからともなく現れ、触れた人間を炭に変えていく特異災害『ノイズ』。

そいつらは現代兵器は全く効かず、建物の壁すら無視して人間に向かってくる災厄。しかも、人間以外には全く害のないというこれまた迷惑なやつらだ。

それに学校帰りの俺は遭遇してしまったのだ。

かれこれ10数分は走ったが、ノイズの気配は全く消えない。

いい忘れていたが、ノイズには活動限界というものがあるらしく、それを越えると自壊していくそうさ。

それに期待して逃げ回っていたのだが……

「あっ……」

——ドサツ——

足が限界を迎えたのか、転けてしまった。それでも死にたくないという思いから必死に立ちあがり、無理矢理足を動かす。

しかしそんな抵抗も虚しく、突如横から出てきたノイズに反応しきれず、右手が触れてしまった。触れた指先から徐々に炭になっていくのが、見える。

ああ、短い人生だったなあ……

肘辺りまで炭になったその時だった。時が凄くゆっくりに感じたとさえ思えば謎の音が聞こえた。

——汝、力を望むか？——

「へ？」

——望むなら、誓いを——

「なんだ、この声？」

——さすれば力を与えん——

よくわからないけど、俺はまだ死にたくない！誓いと知らない！ここを切り抜けられる力をくれ！ノイズを蹴散らせる力を！

——よかろう、ならば耐えてみせよ——

「ガッ!?グアアアアアアア!?!」

その瞬間、俺の右手に激痛が走った。右手が何かに喰われているかのような痛みと共に変質していく。黒く、まるでバケモノのような形

に。炭になって崩れた部分は再生され、他の部分が炭になることはなくなつたが。

「はあはあはあ……なんだこれ……」

意識がハッキリしたときには付近のノイズだけが炭になっていた。けれど、まだノイズは残っている。

俺はヴ・ア・リ・ア・ン・ト・サイ・スを生成、展開しノイズに向けて構える。そして突撃してくるノイズを片っ端から切り裂き、一方的に炭に変えていく。

……待て、俺はなぜこの武器の名前を知っている？なぜこの武器を扱える？

——それが汝に与えた力なり。使い方等の知識はついだ——

再び、先程の声が聞こえてきた。

「お前は何者だ？」

——我はアラガミ。全てを喰らうモノ——

「アラガミ……」

——さあ、全てを喰らえ！——

「いいだろう、やってやるよ！」

サイスを咬刃展開状態に移行。振り回し周囲のノイズを噛みちぎってゆく。

それを続けること数分。ついにノイズがいなくなった。

「ははは、やったぜ。……でもこの腕どう誤魔化せばいいんだ？」

するとサイスが粒子となって消え、腕が元の人の腕に戻った。

試しにもう一度展開を念じると、腕はバケモノのモノと化しサイスも出せた。

「とりあえず帰るか……」

色々あつて疲れた俺は腕を人間のモノに戻し、家への道を歩んだ。家に着いた俺はそのままご飯も食べず、ベッドへ直行。倒れるように眠りについた。

「これは……」

『翼、現場はどうなっている？』

「はい、ノイズのモノと思われし炭が辺りに広がっています。それに人為的につけられた傷が周囲の建物に」

『ふむ、ノイズを倒しうる存在がいるかもしれない、か』

『どういたしましたよう、司令』

『ノイズが倒されているならば一先ず帰投してくれ。その傷がノイズと関係ない可能性も否定出来ない。ただノイズが自壊しただけとも考えられる』

「了解しました」

「おーい、翼。おっさんはなんて？」

「奏。一先ずは帰投してくれ、だって」

「そっか……」

「奏はどう思う？」

「これについてか？」

「うん」

「明らかに倒したやつがいるだろ。じゃなきやノイズが上下に真つ二つなんてならないだろうしな」

「そうよね……」

「しっかしどうやって倒したんだろうな？バウムクーヘン反応？だかなんだかは出なかったんだろ？」

「アウフヴァアツヘン波形だよ、奏」

「そうそう、それぞれ。シンフォギアじゃない、ノイズを倒せる力……」

「気になるよね……」

「ああ」

翌朝、俺は激しく揺さぶられる感覚と共に目が覚めた。

目を薄く開けると隣に住む幼馴染のユウカが俺を揺すっていた。昨日は疲れたんだよ、もう少し寝させろよ。

「ハル―？朝だよー？起きないと……」

起きないと何するつもりだ？どうせいつものつまらないイタズラだろう。無視して……

「ハルくんのベッドの下にパパの秘蔵のこのエロ本（幼馴染モノ）を突っ込むよ？おばさんが見つけれられるように少しだけ見える形で」

ヤメロオ!?!てか、なんでお前俺の部屋にいんの!?!

俺は咄嗟に起き上がり、ユウカを止める。

「お、やっと起きた」

「朝早くからなんだよ。凄い眠いんだけど……」

「へ？もう学校行く時間だよ？」

は？…そういわれて部屋のデジタル時計を見る。そこには8:10の文字が。

……………寝坊した!?!

王の配下となりて（以下略） 2

何処かの世界の何処かに存在するとある名も無き研究所。そこで二人の男女が何かを作成していた。作業台の上には本らしきものが置いてあり、それにコードが多数繋がれ機器からデータを入力していた。

「よし、後はここをこうして……完成だ！」

「やっと完成したのね！これで……」

「ああ、これで……」

「「ついに私たちの悲願が叶う！」」

完成の喜びからか、他に誰もいないのをいいことにこの二人は大声をあげて叫び始めた。そして、二人の壮大なる計画の内容が今、明らかに……

「「そう、完成した万能デバイスが私たちの生活の世話をしてくれることでしょうか。完成した万能デバイスが私たちの生活の世話をしてくれることでしょうか。完成した万能デバイスが私たちの生活の世話をしてくれること……」」

そこまでどころか全く壮大ではなかった。

「いやあ、これが完成して助かるよ。本当に」

「そうねえ、私たち趣味が合うからって勢いで結婚したのはいいけどまさかお互いに家事がからつきしだったなんて……」

研究所の床を見るとゴミやら廃材やら食材やら汚れた服やら……
etc. が散らばっていてよく研究出来たなレベルで汚い。

「うんうん。作ってるものに違法ストレスレのものもある以上人を雇って家事をしてもらう訳にもいかないしね」

「ええ、お腹の中のこの子の為になんとか必要最低限の栄養はとってきたけど……」

「それも発明品の特別製栄養サプリがほとんどだったからね」

この言葉から分かるように女性の方はお腹が膨らんでいた。それも後数週間もすれば産まれそうな感じだ。

「まあ、それは置いといて早く起動しましょう！このままじゃ確実に私たち、人間としての尊厳を失うわ！」

「それもそうだね！」

そして二人は作業台の上に置いてある本を手に取り告げた。

「『王魔の書、起動!!』」

『System Boot』

——システム起動要請確認——

——システムチェック開始……オールグリーン——

——プログラム内容確認——

——家事プログラム……正常起動確認——

——防衛プログラム……正常起動確認——

——管制人格プログラム【ウィズ】……正常起動確認——

——緊急時自爆プログラム……正常起動……人格プログラムによ

り否定、停止を確認。削除開始……削除完了——

——プログラム正常起動。王魔の書、起動します——

緊急時自爆プログラム……正常起動

私の意識が浮上したとき、一番最初に聞こえたのがこれだった。体の感覚は感じられなかったがそれどころではなかった。

マイスターは私に何を組み込んどるんじゃー!?そんなのいらなから即座に消去して!

とか、心の中で叫ぶと通じたのか削除された。うん、確かにデバイスの人格として転生させてくれて頼んだの私だけど、ロボットとかの自爆はロマンだけど!自分には付けられないくないよね……

そんなこんなで意識だけだった私の体に次第に感覚が蘇ってくる。恐らく現実世界での体の用意が出来たのだろう。現実世界に出ると目を開けずに目の前にいるであろうマスターに向け礼をしつつ告げた。

「王魔の書、管制人格プログラム「ウイズ」。正常起動完了しました。あなたが私のマスターですか?」

なお、現実世界での私は何処にでもいそうな黒髪ロングの16〜20歳くらいの日本人女性で服装は仮面ライダージオウに出てくる黒い方のウオズだ。ちなみに胸はそこそこあると言っておこう。なんで分かるかって?そう元からプログラミングされていたデータが

あつたからだ……まあ、転生特典の影響ですよ。

「いいや、私たちは君を作った者だ」

「貴女のマスターとなるのは、今私のお腹の中にいるこの子よ」

まさかのマスターがまだ産まれていない。それに軽く驚きつつ目を開けて情報を得ようとして更に驚くこととなった。

(ジエイル・スカリエッティ!?なんで!?)

私自信がデバイスであるゆえの並列思考マルチタスクのお陰で顔には出さずに内心だけで驚けた。

少しだけ若いがあのマッドで最高評議会に造られたりりなの三期のラスボス……のはずだよな?

というか、女性の方はお腹の中に子どももいるってことは、父親はスカリエッティ!?え、結婚してたの!?まさかのいきなり原作ブレイク!?!……まあ、そこはどうでもいいか。ウオズみたいなこと出来ればいいし。

あ、私の作成者覧にジエイル・スカリエッティ& a m p 常磐 蘭つて名前が。

「マスターである私たちの子が産まれてないのに君を起動したのには理由がある。君にしか頼めない役割があるのだよ」

そうマイスター・ジエイルは悪どい(?)笑みを浮かべて言った。よく見るとマイスター・蘭も似た笑みを浮かべている。何をやらされるかは知らないけど、サポート用に作られた(はずの)デバイスである私は従うのみだけだ。

「なんででしょうか、マイスター」

「今から掃除と私たちの食事を頼む！正直言って死にそう！」
「畏まりました」

……プログラムがあったお陰で体が即座に反応して行動に移すことは出来たが頭は少しフリーズした。理由はわからないけど何が
あった!?色々と拍子抜けなんだけど!?

第二の人生に若干の不安を感じつつも、マイスター・蘭に死なれる
とマスターがいなくなってしまうのでとりあえずは着々とお願いさ
れたことをこなしていくのだった。

近界人とリリカルな世界

地球、海鳴市。海や翠屋のシュークリームが有名なこの町に一人の少年がやってきた。9歳くらいのその少年は町一番の高台に登って町を眺めている。

「ここが地球……だっけ？」

『そうね、カナの出身世界よ』

その少年は誰かと話しているが、辺りには少年以外誰もいない。携帯なども持っていないので通話しているわけでもない。しかし、よく見ると白いロボットのようなものが少年の肩に乗っていて、声もそこから聞こえている。

「やつと母さんの世界についてなのか」

『目的地はわかっているの？』

「ん、高町士郎って人に会いに行けばいいんでしょ？」

『わかっているならいいわ。早く行きましょう、ライト』

「了解、エマ。人に見られないように隠れて」

『はいはい、ステルス【隠】ON』

エマ、と呼ばれた白いロボットはそう言って自身の姿を消した。光学迷彩で姿を周囲と同化したただけだが。

そして少年・ライトはこの町にいるらしい高町士郎を探しに降りていった。

数時間後。

「ないなあ……」
『ないわね』

住宅街を一人と一体(?)は歩いていた。彼らはしらみ潰しに家々の表札を見て高町の名を探していたが一向に見つからない。

「この町から引越したって可能性はないかな？」

『まあ、ないことはないけど、まだ全部見てないからわからないわよ』
「そうだよな……」

と、その時だった。

「やめて！離しなさいよ！」

「うるせえ！黙りやがれ！」

「キヤツ!？」

「——ちゃん!？」

「てめえもだ！」

「早く出せ！」

そんな声がライトの耳に入ったかと思うと、近くから黒塗りの車が走り去っていった。

「なあ、エマ。もしかしなくても今のは」

『ええ、そうね、ライト』

『「誘拐だな(ね)」』

『どうするの?……って言っても、もう決まってるみたいね』

「ああ、もちろん助けにいくさ」

『それで?どっちを使うの?』

エマの言葉に少し考え込むライト。しかしすぐに決まったのかエマを見て告げる。

「そうだな、『ノーマル』の方でいこう」

『了解よ』

「トリガー、起動！」

その言葉を告げた途端、ライトの体がトリオンに包まれ戦闘体へと変わってゆく。黒のアンダーウェアに白のフード付きコートを羽織った姿に。

戦闘体への換装が終わるとライトは即座にエマの【隠】を起動させ姿を消し、先ほどの車が向かった先へと走り出した。

そしてライトのたどり着いた先は一棟の廃ビル。ご丁寧にビルの前には見張りと思わしき人も二人立っている。今は近くに生えている樹の影に隠れてそこを見ている。

『それで、ここからどうするの？ライト』

「こっそり入ってもいいけど、後から応援にこられると面倒くさいから正面から倒していこう」

『了解よ』

「それじゃあ……アステロイド」

【隠】を解除したライトは右手から小さなトリオンキューブを出し、それを二つに分割する。

「とりあえず眠つとけ。ファイア！」

そして放たれたトリオン弾は見張りの一人に命中。そのまま気絶した。さらに急に仲間が倒れたことに驚くもう一人にも続け様に命中し、無力化する。

「生身の人にトリオン弾当てると楽に無力化できるよな」

『本来は万が一、一般人に誤射したときの安全機能なんだけど……』
「まあ、細かいことは気にしない、気にしない」

少し呆れた感じを出すエマをライトは軽く流し、建物の中に入っていく。

中にも数人、見張りと思わしき人がいたが、全て見つかる前に弾速最大、威力最低に設定したアステロイドか、バイパーで死角から当てていき、気絶させた。

「さて、エマ。誘拐された子たちがいるのはこの先だよな？」

『ええ、放った子機が声も拾ったわ。何やら「こいつは夜の一族という化け物なんだよ！」って……どういう意味かしら？』

「さあ？とりあえず助けに行くよ」

ライトは目的地の扉の前に立つと腰に差している孤月を握ると一気に引き抜き、扉を派手に斬り裂いた。

「何者だ！」

「その子たちを助けに来ただけのただの通りすがりだよ。誘拐なんて見て見ぬ振りには出来ないからね」

中にいた男たちは銃を持ち二人の少女を囲んでいたが、突然扉が吹き飛んだ為、そちらに銃を向け構えていた。そして現れたのは肩に何かを乗せた少年。

「……子どもだと？」

「そうだけど、何か文句ある？」

「フンツ、身のほど知らずのガキが。やれ」

リーダー格と思わしき男が指示を出すと周りの男たちはライトに向けて銃を乱射した。辺りに銃弾の衝撃で煙が舞う。

「そ、そんな……」

「ふん、ガキの癖にでしゃばるからこうなるんだ」

誘拐された少女たちはそれを見て悲しみの感情を見せる。あれだけの弾丸を浴びせられたら生きられる可能性は低いと理解したのだろう。その時だった。

「メテオラ+バイパー……トマホーク」

「何!?グハツ……」

声が聞こえたかと思うと光弾が煙の中から飛び出し、男たちの持つ銃に曲線軌道を描き命中。同時に爆発し、その衝撃で銃は全て壊れ、リーダー格以外の男たちが倒れた。

「で、何がこうなるって?」

さらに粉塵の中からライトが無傷で歩いて来た。それに少女たちとリーダー格の男は驚いた。

「さて、覚悟はいいか?」

「き、貴様はこの化け物を助けるというのか!」

「化け物ってなんのこと?そこには女の子二人しかいないけど?」

「知らないのか?なら教えてやんよ。その紫の女はなあ……」

「やめてえ!」

「夜の一族という化け物なんだよ!」

「夜の一族?」

「分かりやすいように言えば吸血鬼だ！」

吸血鬼、もしくはヴァンパイアともいう怪異。血を吸う生き物だ。確かに分かりやすい。……ライト以外にとつては。

「吸血鬼？なにそれ……エマ、知ってる？」

『知らないわね』

「は？」

「とりあえず眠つとけよ」

「待て、てか今その肩のしゃ…ブベラ!？」

ライトは男の言っている意味を理解出来なかったもので、とりあえずアステロイドをぶつけて気絶させた。最後に何か言おうとしていたが、ライトには聞こえなかった。

そしてライトは二人に向き合おうと、

「大丈夫だった？」

歳相応の笑顔を見せながらそう言ったのだった。

I S世界の魔法少女

どこかの建物、どこかの部屋で。パンツ！と、一発の銃声が鳴り響く。それに狙われていた少年を庇って、一緒に連れ去られた少女が胸を撃ち抜かれて倒れる。

「ッ！百夏姉ッ!!」

「ゴホッ……大丈夫。大じよう、ぶだか、ら一夏。……お姉、ちゃんが守……る……から……」

「チツ、このガキが……」

撃たれた少女は夥しい出血で、口から出る言葉も片言になってきている。一方、撃った女はもう一発弾を総点して今度こそ、と少年の方に狙いをつける。

その時、その部屋に息を荒げて一人の女が入ってきて、告げた。

「大変です！織斑千冬がここに！」

「なにッ!?チツ、直ぐに撤退する！」

「その二人はどういたしますか？」

「捨て置け！どうせ一人は助からない」

二人が部屋から出て行って直ぐ。壁が粉碎され、そこから

インフィニット・ストラトス
I S を纏った女性が入ってくる。

「一夏！百夏！」

「千冬姉！百夏姉が、百夏姉が！」

「ッ!?しっかりしろ、助けに来たぞ！百夏！」

今もなお、血を流し続ける少女は焦点のあつてない目で声の方向を見つめ、なんとか口を開く。

「ちふ、ゆお姉、ちゃん……?」

「そうだ、私だ!」

「ど、こ……? いち、かはぶ、じ?」

「ああ、無事だ! だから今は喋るな!」

「お腹、すいた、なあ……」

「帰ったら好きナだけ、なんでも食べさせてやるさ!」

「ねえ、わた、しは、いちか、のお姉、ちゃん、できてた、かな?」

「もういい! 喋らないでくれ! 直ぐに病院に……百夏? 百夏! 起きろ、起きてくれ! 百夏アアア!!」

その言葉を最期に、少女は事切れた。後には泣き叫ぶ姉弟の姿があった。

「……夢、か。ずいぶんと懐かしい夢を見たな……」

「おやおや? ようやくお目覚めですか? マスター?」

「……ガリイか」

「この年になつてお寝坊だなんて。マスターちゃん、かつわいい!」
「ガリイ、あんまりマスターを弄るんじゃないゾ」

「ミカの言う通りだ。マスターは地味に豆腐メンタルだからな」
「レイアちゃん。それ、マスターにとどめさしてますわよ？」

いいもん。私が豆腐メンタルなのは事実だし……。別にいじけてないし。(見た目は)子供だもん……。グスッ。数百年生きてるけど、(見た目は)子供だもん。

「キャロル、遊びに来たワケダが……。何してるワケダ？」

「ハッ！な、なんでもない！」

「そうか？ま、そこはどうでもいいワケダ」

カエルのぬいぐるみを持った彼女はここ数百年来の友人の一人。プレラーティイ。パヴァリア光明結社？だかなんだかに所属している、私と同じ錬金術師だ。

あ、私の今世の名前は『キャロル・マールス・デインハイム』。今世のと言う通り、私はこれまでに二回転生している。前世の名前は『織斑 百夏』。その前は……。もう覚えていない。最初の転生は自称神様を名乗るお爺さんに転生させてもらった。前々世で好きだったラノベ、インフィニット・ストラトスの世界に転生させてくれると言ったので、確実にISに乗れるように主人公である『織斑 一夏』の双子の姉妹として転生させてもらえるように願った。まあ、結局一度もISには乗れなかったけどね。……。一夏と千冬お姉ちゃん、元気にしてるのかな？

「ところで、プレラーティイ。今日は何しに来た？」

「面白そうなニュースを持ってきたワケダ」

「何かあったのか？」

「先日、日本という国に、世界中から合計2000発を越えるミサイルが発射されたワケダ」

……。え？それって、確か白騎士事件と同じ!?ちよつと後で調べてみ

ないと。

「それで、日本はどうなったんだ」

「謎の白銀の……アイエス？だったかなんだかいうロボットを纏った人が全部、それも後から出てきた船や戦闘機も全て一人で撃墜したワケダ」

「とうか、マスターもいい加減テレビでも置いたらいいのに……」

「ガリイ貴様、ここに電波が来るとでも思ってるのか？」

「もつちろん、来るわけないよね♪」

イラつかせてくるガリイに怒りを蓄積していると、私の家であるチ・フォー・ジュ・シャトーに付けている警報装置が作動した。

「これは、いつものあれなワケダ」

「そういうことだ、プレラーティ。悪いが今日の所は帰ってもらえるか」

「仕方ない。あ、サンジェルマンはキャロルが参加してくれることをいつでも待ってるって言ってたワケダ」

「すまんが、断ると伝えてくれ。あいつから聞いてたパヴァリアの状況を聞く限りは所属したくない」

「ま、やっぱりそうなるワケダ」

プレラーティは足元にジエムを落として転移した。サンジェルマンはいい人なんだけど……って、この話は後にして。

「エルフナイン！」

「ハイッ！場所の特定が完了しました！座標送ります！」

「よし、行くよ。いつも通り、ガリイとファラは人命救助。ミカとレイ

アは私と一緒にノイズの殲滅。エルフナインはサポートを」

「わかったゾー！」

「承知いたしました」

「派手に了解」

「なんで、ガリイちゃんが人命救助なんだか……」
「わかりました！」

ガリイは黙る！ さっさとノイズを倒しに行くよ！

IS世界の魔法少女2

日本、鎌倉。そこは鎌倉の大仏や様々な寺院などで有名な場所。所謂観光地だが、一般には知られていない国防の重要な地点でもある。

「ほう。まさか貴様が連絡してくるとはな。キャロル・マールス・デインハイム」

『ふん、俺の名前を知っているのか。まあいい、お前が風鳴 訃堂であっているな?』

「いかにも。我が日本を守護せし防人、風鳴 訃堂である。何の用じゃ」

『取引だ』

「取引だと?」

『ああ。俺の持つ技術や戦力を可能な限り貴様に提供してやる』

「ノイズに関する技術もか」

『もちろんだ。世界から日本という国を守るのにノイズを解析して得た技術はかなり有用だろう』

「……して、貴様は何を望む」

『この二人の保護だ。彼らの安全を確保し続ける。ああ、私生活には関与するなよ?危険を尽く排除してくればそれでいい』

「それだけか?」

『ああ。それ以外は望まん。それで、どうする風鳴 訃堂』

「えーと、こんな感じでいいんでしょうか?」

「勿論だよ、エルフナイン！流石私の妹……」

「ボクはキャロルから造られたホムンクルスですけどね」

「戸籍上は妹だからいいの！」

今、私の前に立っているエルフナインが着ているのはIS学園の制服。これからエルフナインが入学するから試しに着てもらった。

あのクソジジイとの取引で一夏と千冬お姉ちゃんの安全は確保された。気に入らないが、国防第一のあのジジイは私が約束を違えない限りは守ってくれる……はず。今のところノイズと戦えるのは私と自動人形の皆だけなのだから。

第二回ではこの時代にも存在した『私』の事件で決勝を放棄したとはいえ、千冬お姉ちゃんの実力は世界一。さらにその弟ともなると変な所に狙われないとも限らない。

ちなみに第二回モンドグロツゾで『私』を助けにいなかったのは、ここで助けて歴史が変わり、私が消える可能性があったから。それにかなり昔の事だから忘れていたけど、小中学校の教科書に私が乗っていたのも助けにいなかった理由の一つ。どうやら世界で初めてノイズへの対抗策を作り上げ、全世界にノイズを感知したら警報を鳴らす装置を配備したのが評価されたらしい。『私』が過去に転生しないとこの時代がどうなるかわからなかった。……本音を言えば助けてあげたかった。

「キャロル？」

「あ、いや、見とれてただけだから」

「大丈夫です。二人が心配なのはわかります。だからボクがIS学園に行くんですよ」

エルフナインが学園に行く理由。それは一夏がISを動かしたから。本来は女性しか動かせないIS。それを動かした男と言うことで一夏はIS学園に強制入学することになっている。

「頼んだよ。何かあったら私に連絡してね」

「はい！」

「それと彼女たちも学園に行くみたいだから出来たら仲良くしてあげてね？」

「はあい、皆さん揃ってますね？」

キツイ。何がキツイって、俺以外のクラスメイトは女性しかいないこと。しかもクラスメイトだけじゃなく、先生や同級生、先輩まで全てが女性だ。

「私はヴァネッサ・デイオダデイ。このクラスの副担任よ。気軽にヴァネッサ先生と呼んでね」

教室の前に立つ先生の自己紹介が終わって、皆の自己紹介が始まる。その間に周囲を見ると見知った姿が見えた。あれは、幼なじみの箒！助けてくれ、と思ったら目をそらされた。酷い奴だ。

「織斑くん？それとも一夏ちゃんって呼んだ方がいいかな？」

「くんでお願います！」

ハッ！危ない危ない。次は俺の番だったのか。早くないか、ってそらそうか。俺は『お』りむら』だからな。てか、この先生男をちゃん付けで呼ぼうとするとは。

「それじゃあ織斑くん、改めて自己紹介してもらえるかな？」

「えーと、織斑 一夏です！よろしくお願います！」

そう言つて頭を下げる。自己紹介つてこれでいいよな？

「……………」

「……………」

え、なに待ち？あ、そうか。

「以上です！」

そう言うと同時に何人かが椅子から落ちる音が聞こえた。何故に？

「もう少しマシな事を喋れ馬鹿者」

疑問を口に出す前に、そんな声が聞こえて頭を何かで叩かれた。痛い痛みと一緒に聞こえてきた声には覚えしなくて、振り向くと案の定見知った顔が。

「ゲエツ!?ネロ!?!」

「誰が暴君と呼ばれたローマ帝国の皇帝だ」

そしてまた頭にはしる痛み。何で叩いてきたのか疑問に思うと、その手にあつたのは出席簿だった。

「諸君、初めまして。私が担任の織斑 千冬だ。お前たちはこれから I S 学園の生徒となる。I S を扱うがゆえに担任である私の指示にはハイか y e s で答えろ。いいな?」

そんなんだから暴君……いえ、なんでもないです。だからその目付き止めてください。

「では、自己紹介の続きを」

「ウチはミラアルク・クランシユトウン。……よろしく頼むんだぜ」
「わたくしめはエルザ・ベートであります。えーと、よろしく頼むであります」

おい。俺以外にもいるじゃないか。あ、ヴァネッサ先生に二人ともアイアンクローされた。よく片手で持ち上げられるなあ。

「エルザちゃん？ミラアルクちゃん？貴女たちもなのかなー？」
「ちよ、ヴァネッサ！ウチら、こういうの初めてで何を話せばいいのか、全くわからないんだぜ！」

「そうであります！だからアイアンクローは止めて欲しいであります！ヴァネッサの力だといくらわたくしめたちでも……」

「ダーメ♪後、ここでは先生ね。じゃないといくらお姉ちゃんでも怒っちゃうぞ？」

「今、ヴァネッサも自分のことお姉ちゃんって、ギヤアアアア!!!」

「ミラアルク……貴女の尊い犠牲は無駄にしないでありますよ。ギヤアアアア!!!」

あ、二人とも落とされた。なんて力だ……千冬姉はともかく、あの先生も怒らせないようにしないと。

「ふー。はい、じゃあ次の人！」

「あ、はい！私は——」

落とされた二人は放置されて、何人かが続ける。さて、次は……え？

「ボクはエルフナイン・マールス・ディーンハイムです。えーと、趣味は錬……じゃない機械弄りです。知識だけは自信あるので分かなければ色々聞いてください。よろしくお願いします」

髪の色とか声とかは全然違う。なのになんで？ディーンハイムさんから百夏姉の面影を感じるのは……。この後、数人自己紹介して全員の分終わると千冬姉……じゃない、織斑先生が話し始めた。

「さて、それでは休憩に入る。次の授業の準備を忘れずにチャイムまでには席についておけよ」

さて、休み時間はどうするかな。さつき気になったディーンハイムさんは……。

「エルザ、ミラアルク。大丈夫ですか？」

「流れ星が見えるぜ……」

「床がギンギンに冷えてやがるであります……」

ヴァネッサ先生に落とされた二人の介抱をしている。授業始まるまでに起こさないと、織斑先生に怒られるしな。俺も手伝った方がいいか。

「おい、一夏」

「あ、箒」

「ちよつと来い」

「え、いや待ってくれよ、箒」

「待たん、いいから来い！」

そうして箒に拉致される俺だった。何故か屋上に連れていかれてしばらく話をして教室に戻ると、箒共々待ち構えていた織斑先生に頭を叩かれた。恨むぞ、箒……。

「えーと、ボクの部屋は……あ、ここですね！」

手元の鍵と目の前の部屋の番号を交互に見て、間違っていない事を確認したボクは、ノックをしてから鍵を開けて中に入る。

同室の人はどんな人なんでしょう？優しい人だといいなあ。

「誰かいますかー？……出てるのかな」

中に入ってみると、二つあるベッドの内の一つに荷物が置かれていた。床にも置かれていたカバンの中身が見えていたので覗いてみると……。

「これは……仮○ライダーにガン○ム、その他色々なDVD……キャロルの部屋にあったのと似通っていますね。同じ趣味なんじゃないか？」

まあ、勝手に中身を物色するのは良くないですね。自分の荷物を整理してキャロルと連絡を取りますか。